A列車で行こう

落合恵子

新潮文庫

日本音楽著作権協会
(出)　許諾番号　第8857057-801号

A列車で行こう

新潮文庫　お-31-1

昭和六十三年八月十五日　印刷
昭和六十三年八月二十五日　発行

著者　落合恵子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Keiko Ochiai 1985　Printed in Japan

ISBN4-10-109311-3 C0193

新潮文庫

A列車で行こう

落合恵子著

新潮社版

4114

目次

第一章　唄えないひとよ……七
第二章　夢一夜（ワン・ナイト・ドリーム）……五四
第三章　パパは王様……一〇三
第四章　ジャズ・キッズ……一五八
第五章　夜明けの子守唄……二〇九
あとがき……二六五
解説　常盤新平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

A列車で行こう

第一章　唄えないひとよ

一台分だけ空いたパーキングスペースにようやく車を入れると、久仁子は躰を投げ出すようにして運転席のシートに凭れた。

「厭なものを……」

吐きすてるように、言葉が口を突いて出た。厭なものを見てしまった。よりにもよってこんな日に。

荒い息を吐きながら久仁子は眉を寄せた。喉の奥のところに嘔吐感が止まって、動悸がまだおさまっていなかった。こみ上げてくるものを飲み下して、助手席に手を伸ばすとクラッチバッグを引き寄せる。煙草を喫いたかった。なんとか気を落ち着かせたかったのだ。

苛立った手つきで、久仁子はバッグを探った。パッケージを探り当てる。一本引き抜いて口にくわえた。火をつけると深々と煙を吸いこみ、それから吐き出した。何度かそれを繰り返しているうちに、いつか吐き気は遠のいていた。

息を整えると久仁子は目を上げた。フロントグラスの遥か前方、残照を含んだ空を幾つかのブロックに区切るように屹立するビルの間に、夕陽がいま沈もうとしている。光を失った、ただ赤いだけの夕陽だった。

ほんの十分か十五分前、空いたパーキングメーターを探してクーペの速度を落とした直後、反対車線に激しいブレーキングとタイヤの軋み、ほとんど同時に鈍い衝突音を聞いた。

とっさに事故だとわかった。見たくない、そう思った。しかし視線は気持ちを裏切って、反射的に音がした方角を見ていた。かなり大型の黒いオートバイが横倒しになって、路上に男が倒れていた。その数メートルさきのグリーンベルトには、車体を少し傾けたタクシーが突っこんでいた。鞘翅目の昆虫の死骸を思わせる倒れたバイクと、いましがたまでそれに跨がっていたはずの男の白いヘルメットが、鮮明に久仁子に璋一を思い出させた。

夫の璋一は、愛用のバイクもろともガードレールの支柱に激突して突然この世を去っていた。報らせを受けた久仁子が救急病院に駆けつけた時、璋一は息をひきとったところだった。包帯に点々と散った血の色が、何分か前までは鼓動していたはずの夫の存在をひどくなまなましく証明していた。

――決めたよ。そのことで話したい。これから、そっちに向かう。

街角のボックスから、いつもの電文のような電話をかけてよこしたすぐ後、璋一はガードレールに激突したのだった。

決めたよ。話したい。これから、そっちに向かう……。受話器に痛いほど耳を押し当てて聞いた夫の言葉を、久仁子はまた心の中でなぞってみた。あの時、璋一は何を私に伝えようとしたのだろう。

――決めたよって、何を？　あなたは、どちらを選んだの？

そこに璋一がいるように、久仁子は声に出して言ってみた。夫の選択は、遺体とともに永遠に葬り去られてしまっている。

夕陽はすっかり沈んで、車窓のほとりまで薄い闇が押し寄せてきていた。赤や青のネオンチューブを貼りつけたビルの壁面の時計は、六時十五分を示している。暗い澱を気持ちの底に残したまま、久仁子はコートとバッグを抱えるとドアを開けて外に出た。

刺すような冷たい風がさらに強くなっていた。

風に乗って、どこからか飛んできたのだろう。パーキングメーターに硬貨を落として歩き出した久仁子の足もとに、一枚のポスターが絡みついた。

「ケイ夏木・ヴァレンタインコンサート」

グレーに近いブルーの地に白抜きでそう記されている。それよりずっとポイントを落として「二年間の沈黙を破って、ケイがいま愛を唄う」と活字が並び、その横に、うつ向き加減の女の横顔が闇から浮き出たような写真になって印刷されていた。

久仁子は、ポスターの中のケイ夏木に強い視線を当てた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すでに幾つかの汚れた靴が踏んだ痕跡があった。短いカーリーヘアーに隠され、輪郭が曖昧になった女の横顔に泥がつき、細かい皺が寄っていた。それが、ケイ夏木の表情を暗く深刻にみせていた。舗道に貼りついた女をなおも凝視しながら、スーツのポケットに手を入れ、久仁子はチケットを指さきで確かめた。それから、ジャズスポット『A列車』への階段を昇りはじめた。

開演まで五分しかないというのに、客席は三分の一も埋まっていなかった。

百五十ほどの客席の前にスタンドマイクが一本。それを取り囲むようにスタンウェイのピアノと、チューニングはすませたのだろうか、ベースとドラムスが置き忘れられたようにあった。

たぶん客席は埋まらないまま、コンサートははじまるだろう。客は思い思いの席に散り、そのためになおのこと閑散とした感じが強調されていた。暖房が強く効いているのに、コートを羽織ったままの客が多かった。活気のない雰囲気が寒く感じさせるのだろう。

ピアノの上の白い霞草がスポットライトにはかなげに浮いている。

「お寒い風景だな」

呟く声が、出口に近い席にいる久仁子のところまで届いた。

もう開演のはずだった。

「二年間の沈黙を云々と言うけどね、どうかな、ケイは」

久仁子の斜め前に坐ったふたり連れの男の一方が、低い声で言った。濃い顎鬚をたくわえ、革のジャンパーを着ている。尖鋭的な評論で識られるジャズ評論家ではなかったか、と久仁子は思う。

「彼女、もう何度もステージしくじってるからな」

コーデュロイのスーツに、派手なチェックのマフラーを巻いた隣りの男が相槌を打つ。やはりジャズの関係者なのだろう。

「ルックスでも売れる若手のヴォーカリストが次々に出てきたから、ケイはもうお呼びじゃないって声もあるけどね」

「クスリをやってたって話があるね、彼女。ステージをすっぽかしたり、上がったはいいが歌詞は忘れる、音程はメロメロで、これでケイも終わりだと何度か聞かされたよ」

「それはそれで、凄味のあるステージだったらしいけどね」

「ステージで血を吐いたこともあるって言うじゃないか。クスリだけじゃなくて、アルコールのほうもひどかったらしいから」

「それでも、へたっぴいなかわい子ちゃん歌手が唄うのとは違う、と……」

「それにしても、この入りじゃ淋しいな」

「ケイにとっては今夜が正念場、一か八かの賭けだからな。ここで成功すりゃ、不死鳥のように甦えるケイ夏木、という按配で……」

「どうかな。そうなりゃ、いいが」
「祈るしかないね。スタッフも客席の連中も皆、そう願ってる」
頷き合う男たちを目の縁に捉えて、私は彼女の成功なんか祈らない、と久仁子は心の中で叫んでいた。そう、彼女が失敗するのを見に来たのよ……。
駆けこむように入ってきた客たちで、空席がまた幾らか埋まった。と、突然にコンサートははじまった。
セーターとジーンズ、スーツと勝手な服装をしたトリオが持ち場につくと、すぐにピアノをフィーチャーした曲が軽く流れはじめたのだ。スポットライトが客席を嘗めるように一巡して、やがて左手のカーテンで仕切られた入口に丸い輪を止めた。そこからケイが登場するのだろう。
息を殺して光の輪を見つめる久仁子の心に、ひとつの感情が寄せていた。
――いまなら、まだ間に合う。このまま席を立って外に飛び出せばいいのだ。いまさらケイのステージを見てどうしようというのだろう。
ピアノが、『マイ・ファニー・ヴァレンタイン』のイントロを弾き出した。ベース、そしてドラムスがその後を追う。最初のイントロが終わっても、ライトの輪の中にケイは登場しなかった。ステージと楽屋口を仕切る黒いカーテンにスポットライトの光が間がぬけたように止まっているだけだった。再びイントロが繰り返される。

三回目のイントロが終わった時、ようやくスポットを押し開けたように、ケイ夏木が現われた。

パラパラとまばらに拍手が湧きもしたが、大半の客は息をのむようにしているのが久仁子にはわかった。それほど異様な登場の仕方だった。

自分の意志ではなく、誰かに背を押されるようにしてケイはそこに現われた感じだった。光のない眸だった。記録映画のスポットライトに突然摑まった野生の小動物みたいだ、と久仁子は思った。

なんの飾りもないシルクジョーゼットの黒いロングドレスを着たケイは、マイクのほうに歩み寄るでもなく、その場に竦むように立っていた。深く切りこんだVネックから、ライトのせいだけではなく異様に白い胸もとと瘠せた鎖骨が浮き上がっている。

すでに、ある失望が客席を充たしていた。しかし、誰も立とうとはしなかった。

久仁子は揃えていた膝頭を崩してゆっくりと足を組んだ。淡い優越感にゆったりと全身を明け渡しながら、ケイが耳朶から下げた涙型のガラスのイヤリングが小刻みに揺れているのを見つめていた。

「やっぱり、駄目だったか」

「震えてるよ、彼女。まだクスリをやってるのかもしれないな」

斜め前の男たちが、小声ではあったが無遠慮に囁き合っている。

ケイに当たっていたスポットがピアノに移った。その時、久仁子は、ピアノの男が他のメンバーにそっと目配せするのを見てとった。ベースが音を落とし、次いでドラムスが低くなって、やがて鳴り止んだ。ピアノソロだけで何度目かのイントロがはじまった。立ち竦むケイを宥め、リラックスさせるような優しい、そして少し哀し気なタッチのピアノだった。

スポットがピアノに当たっていても、闇の中にいるはずのケイに久仁子は視線を向けていた。

何度かイントロをリフレインしたピアノが、さきを弾いていった。耐えかねたように、客席から「ケイ！」と呼ぶ声がした。声に誘発されるように、再びまばらな拍手が起きた。その呼び声の方角に詫びるような視線を流して、すぐにピアニストはケイに微かな笑顔を戻した。

――さあ、どうしたんだ、ケイ。一声出してごらんよ。そしたら楽になるよ。

なぜか久仁子は、そんな風にピアノソロを聞いていた。いつの間にか、ドラムスとベースが加わっていた。バンドと客席が一体になって、ケイをステージの中央に呼びだそうとしていた。その包みこむような暖かな雰囲気の中に、久仁子の心を挑発するものがあった。

もしかしたら、あの男はケイを愛しているのかもしれない。脈絡もなくそう思って、久仁子は三十代の前半と思われるピアニストに目を向けた。パンフレットには木島裕一トリオとあり、ピアノがその木島という男だった。

他のメンバーも、客でさえ、ケイを庇うような空気を作り上げていた。が、ピアノのそれは彼らが作る空気よりもっと強烈な何か、疼くような願いを溶かしこんでいるように思えた。

――さあ、お願いだよ、ケイ。みんなが待っているよ。……ほら、もう一度イントロに入るよ、ほら。

スポットがゆっくりと移っていった。髪を抱えこむように両手を頭にもっていっているケイが浮きだした。

あれが人の肌かと思われるほどに、白く細い腕だった。

ケイが中央のマイクに向かって、ゆっくりと一歩を踏み出した。足もとが少しふらついているのがはっきりしていた。ピアノがひときわ高く鳴った。

やっとといった感じで、ステージの中央に辿りついたケイは、スタンドからマイクをはずした。そして、ピアノのほうをゆっくりと振り返った。ピアノが微かに頷いてみせる。それが合図のように、ベースとドラムスが抑さえて弾きだした。

ケイは、はっきりとそれとわかるように大きく息を吸いこみ、そして突然に唄に入った。あっと思うような唄いだしだった。少し早かった。しかしすぐにピアノが、次いでベースとドラムスが追いついてフォローした。

My funny Valentine, sweet comic Valentine

掠れた、少し悲しげな声だった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com